

Title	執筆者紹介
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1976
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.4 (1976. 7) ,p.65(331)- 65(331)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19760700-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前に一段低く丸石を無数敷いてあった。他のサークルもまばらながらそれぞれ棒石が立っていた。これらに用いられた石は全て花崗岩である。

正円であるBのものだけは小砂礫が約三〇糎ほどの深さに敷き詰めてあり、その下は攪乱されないロームで木炭の混入はなかった。他の環石はほとんど木炭を包含していた。樹枝を焼いたらしく丸棒になっているものが多かった。人骨はB以外は、量の多少はあったが全部出土した。AとC（BとあるのはCの誤りであろう）の三〇糎ほど下方に木炭と混じて人骨が一带にひろがっていた。全部で何一〇〇体もの焼かれた成人の頭蓋骨、下顎、肋骨、上膊、脛骨などの破片であったという。Dからは両手に拵うほどの人骨がその石畳の下から出土した。

この遺構の時期については正確なことは判らないのであるが。この台地からは陸奥式土器や石小刀などが出土するという（武藤 一九五一・五〇―一）。すると、晩期に属す可能性が強いといえよう。

配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義（上）

執筆者紹介

佐志 伝 慶応義塾高等学校教諭

武者 章 慶応義塾大学院修士課程修了

高山 純 東海大学講師

小宮 孟 慶応義塾大学院修士課程修了、暁星学園講師